第二部

ローコードで変わる
開発体制と内製化の未来

外注開発の限界を超え、
自社で作り・育てるシステム開発へ

株式会社ウイング　Dxサービス推進室

2025.11.14

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

本日お伝えすること

本セッションでは、DX推進において避けて通れない「内製化」というテーマについて、最新のデータと実践的な知見をお届けします。外注開発が主流だった日本企業において、なぜ今、内製化への転換が求められているのか。その必要性と、実現に向けた具体的なアプローチを、事例を交えながら解説します。

1 外注開発の限界と内製化の必要性

柔軟性の欠如、ノウハウの流出、ブラックボックス化など、外注開発モデルの課題と、内製化が求められる背景を解説します。

2 DX人材の現状と求められる人材像

85.1%の企業が実感する深刻な人材不足の実態と、ビジネスアーキテクトなど、これからのDX時代に必要な人材像を提示します。

3 段階的な内製化アプローチと組織体制

パートナー主導から自社主導へ、無理のない3段階の移行モデルと、内製化を支える組織体制の構築ポイントを紹介します。

4 ローコード開発を活用した開発戦略

開発生産性を3〜5倍向上させるローコード開発の効果と、急成長する市場動向、内製化を加速させる活用方法を解説します。

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

外注開発の限界と内製化の必要性

デジタル技術が企業の競争力を左右する時代において、システム開発の内製化は単なる選択肢ではなく、生き残りをかけた戦略的な取り組みとなっています。

なぜ今、内製化が求められているのか

1

ビジネス環境の変化

市場の変化スピードが加速し、迅速な対応が競争優位の源泉に

2

DX推進の本質

デジタル技術を活用した事業変革には、自社での試行錯誤が必要

3

2025年の崖

既存システムの老朽化により、内製化体制の構築が急務

外注開発モデルの5つの限界

柔軟性の欠如

仕様変更への対応が困難で、市場変化に追従できない

ノウハウの流出

開発を外部に依存することで、技術が社内に蓄積されない

ブラックボックス化

システムの中身が分からず、保守・改善が困難に

コスト増大

多重下請け構造により、中間マージンが発生しコストが膨らむ

スピードの低下

外部との調整に時間がかかり、開発スピードが上がらない

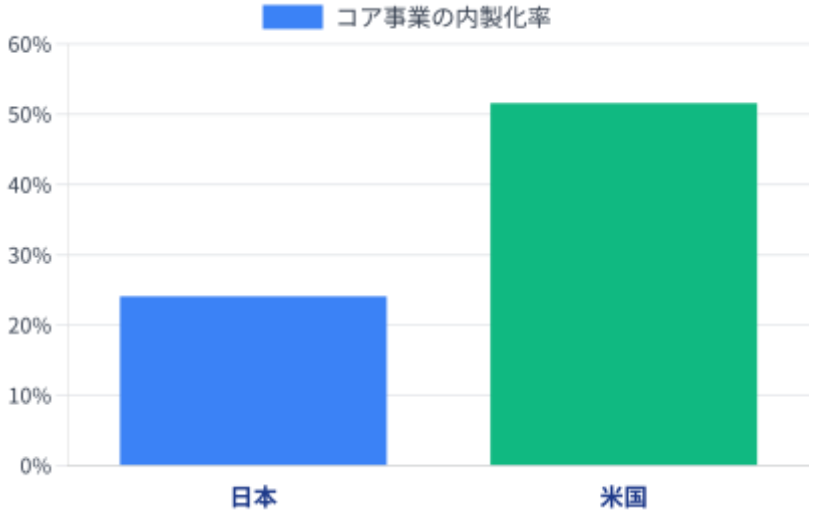
出典.経済産業省「DXレポート」、IPA「DX動向2025」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

日本の内製化率は米国の半分以下

情報処理推進機構(IPA)の「DX白書2023」によると、コア事業におけるシステム開発の内製化率は、日本が24.8%であるのに対し、米国は53.1%と、2倍以上の開きがあります。この格差は、日本企業がDX推進において直面している構造的な課題を如実に示しています。

項目	日本	米国	格差
コア事業の内製化率	24.8%	53.1%	2.1倍



この格差が意味すること

日本企業の多くは、競争力の源泉となるシステムを外部に依存

米国企業は戦略的に重要なシステムを自社でコントロール

内製化の遅れがDX推進のボトルネックに

出典: IPA「DX白書2023 第3部 企業DXの戦略」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

DX推進を阻む深刻な人材不足

85.1%

の企業がDX推進人材の「量」が不足していると回答

IPA「DX動向2025」の調査によると、実に85.1%もの日本企業がDX推進人材の「量」が不足していると回答。米国（26.4%）やドイツ（47.5%）と比較しても突出して高く、日本企業が直面する人材不足の深刻さを物語っています。

特に不足している人材

- **ビジネスアーキテクト**
  事業戦略とIT戦略を結びつける人材
- **データサイエンティスト**
  データを活用して価値を創出する専門家
- **技術と事業をつなぐ人材**
  両方の言語を理解し橋渡しできる人材

人材不足の影響

- DX推進のスピードが上がらない
- 内製化を進めたくても人材が確保できない
- 既存社員のスキル転換が追いつかない
- 人材不足がDX推進の最大のボトルネックに

出典:IPA「DX動向2025」、IPA「DX動向2024 - 深刻化するDXを推進する人材不足と課題」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

内製化で得られる3つの戦略的価値

システム開発の内製化は、単なるコスト削減策ではありません。ビジネスの変化に迅速に対応できる「スピード」、現場の声を反映した使いやすいシステムを作る「品質」、そして開発を通じて得られる技術とノウハウの
「蓄積」という、3つの戦略的価値をもたらします。これらは、DX時代において企業の競争力を左右する重要な要素です。

1

スピード

市場変化への迅速な対応

外部との調整が不要で、意思決定から実装までが早い

小さく作って素早く改善するアジャイル開発が可能になり、ユーザーフィードバックを即座に反映できます。

2

品質

業務に最適化されたシステム

現場の声を直接反映できる

業務とシステムの両方を理解した人材が開発することで、ユーザー視点での継続的な改善が可能になります。

3

蓄積

技術とノウハウの社内蓄積

開発経験を通じて人材が育つ

システムの中身を理解し、自律的に改善できる人材が育成され、長期的な競争力の源泉となります。

出典:IPA「DX白書2023」、各種事例研究

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

内製化推進の課題

内製化の重要性は理解していても、実際に推進するには多くの課題があります。2025年版中小企業白書によると、DX推進において「費用の負担が大きい」「DXを推進する人材が足りない」という2つの課題が、いずれの取組段階でも高い割合で指摘されています。これらの課題を乗り越えるためには、段階的なアプローチと適切な支援体制が不可欠です。

課題 1 初期投資とROI

開発環境の整備

開発環境の整備や人材育成に相応の投資が必要

短期的にはコスト増

立ち上げ期は外注と並行するためコストが増加

ROIが見えにくい

効果が現れるまでに時間がかかり、経営判断が難しい

課題 2 組織体制と文化

外注依存体質からの脱却

長年の外注依存から内製化への転換は容易ではない

失敗を許容する文化

試行錯誤を前提とした組織文化の醸成が必要

経営層のコミットメント

トップダウンでの意思決定と継続的な支援が不可欠

出典:2025年版中小企業白書、IPA「DX動向2024 - 深刻化するDXを推進する人材不足と課題」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

DX時代に求められる人材像

DX推進を成功させるためには、技術だけでなく、ビジネスとの橋渡しができる多様な人材が必要です。ここでは、特に重要な3つの人材タイプを紹介します。

ビジネス アーキテクト

事業戦略とIT戦略を結びつける

経営戦略やビジネスモデルを理解し、それを実現するためのIT戦略を設計できる人材。DXの方向性を定め、全体最適を図る役割を担います。

- 経営戦略の理解
- IT戦略の立案能力
- 部門間の調整力

データ サイエンティスト

データを活用して価値を創出

膨大なデータから意味のある情報を抽出し、ビジネス課題の解決や新たな価値創造につなげる専門家。データドリブンな意思決定を支援します。

- 統計・機械学習の知識
- データ分析ツールの活用
- ビジネス課題の理解

フルスタック 開発者

フロントエンドからバックエンドまで幅広く対応

UI/UXからサーバーサイド、データベースまで、システム開発の全工程を理解し、実装できる人材。迅速な開発と柔軟な対応が可能です。

- フロントエンド技術
- バックエンド技術
- インフラ・DB知識

出典:IPA「DX推進スキル標準(DSS-P)」、経済産業省「デジタルスキル標準」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

DX人材に必要なスキルセットと育成方法

DX人材の育成には、技術スキルだけでなく、ビジネススキルやマインドセットの変革が必要です。IPA「DX動向2024」の調査では、DXで成果を上げる企業ほど、人材確保に必要な取組を行う割合が高いことが明らかになっています。また、自社にとって必要な人材像や評価基準を明確に持つことの重要性も指摘されています。

出典: IPA「DX動向2024 - 深刻化するDXを推進する人材不足と課題」、参考資料

必要なスキルセット

技術スキル
クラウド、API、データベース、ローコード開発ツール

ビジネススキル
業務理解、課題発見力、プロジェクトマネジメント

マインドセット
アジャイル思考、失敗から学ぶ姿勢、継続的改善

効果的な育成アプローチ

- OJT(On-the-Job Training)
  実際の開発プロジェクトを通じた学習
- **段階的なスキル移転**
  簡単な作業から始めて徐々に複雑な開発へ
- **外部パートナーとの協働**
  専門家の支援を受けながら学ぶ
- **人材像と評価基準の明確化**
  目指すべき姿を明確にする

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

段階的な内製化の実践:鈴廣蒲鉾本店様の事例

フェーズ1
パートナー主導開発
パートナーが開発を主導

自社は要件定義とテストに参加

フェーズ2
共同開発
パートナーと自社が協働

簡単な機能から自社で開発

パートナーがサポート

実践的なスキルを身につける

フェーズ3
自社主導開発
自社が開発を主導

パートナーは技術支援に特化

独立した開発体制を確立

継続的な改善サイクルを実現

鈴廣蒲鉾本店様の成功事例

- **フェーズ1**: パートナー主導で基幹システムを構築。要件定義とテストに参加
- **フェーズ2**: 簡単な機能追加から自社開発を開始。パートナーのサポートを受けながら実践的なスキルを習得
- **フェーズ3**: 新規システムを自社主導で開発。パートナーは技術支援に特化し、独立した開発体制を確立
- **成果**: 開発スピードが大幅に向上し、現場の声を即座に反映できる体制を実現
- **人材育成**: 社内に技術とノウハウが蓄積され、自律的に改善できる人材が育成された
- **ポイント**: 無理のない段階的な移行により、リスクを最小限に抑えながら内製化を実現

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

内製化に最適なGeneXus+G.RAD.Eの強み

一般的なローコード開発ツールの中でも、GeneXus+G.RAD.Eは内製化を成功させるための独自の強みを持っています。特に、段階的な技術移転と長期的な保守性において、他のツールとは一線を画す特徴があります。

1 真のマルチプラットフォーム対応

- 一度の開発でWeb、モバイル、クラウド環境に展開
- プラットフォーム変更時の再開発コストを大幅削減
- 技術トレンドの変化に柔軟に対応

2 長期保守性と安定性

- 30年以上の実績を持つ成熟した開発基盤
- レガシーシステムの段階的な刷新に最適
- G.RAD.Eによる品質保証で保守コストを削減

3 段階的な技術移転を支援

- パートナー主導→共同開発→自社主導への移行をサポート
- 開発プロセス全体を可視化し、ノウハウ蓄積を促進
- 鈴廣蒲鉾本店様の事例で実証済み

4 人材不足を補完する開発基盤

- プログラミング専門知識が少なくても開発可能
- G.RAD.Eが開発標準を自動適用し、品質を担保
- 既存社員のスキル転換がスムーズに進む

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

主要ローコードツールとの比較

内製化を成功させる上で重要な6つの観点から、GeneXus+G.RAD.Eと主要なローコード開発ツールを比較しました。GeneXus+G.RAD.Eは、特にマルチプラットフォーム対応、長期保守性、段階的技術移転において優位性があります。

◎:非常に優れている ○:優れている △:普通 ×:劣っている

比較項目	GeneXus +G.RAD.E	OutSystems	Mendix	Power Apps	kintone
マルチプラットフォーム対応	◎	○	○	△	△
長期保守性	◎	○	○	△	○
段階的技術移転	◎	○	○	△	○
学習の容易さ	○	△	△	○	◎
ベンダーロックイン回避	○	△	△	×	△
コスト	○	×	×	○	◎

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

出典:AI経営総合研究所「ローコード開発プラットフォーム比較2025」、各社公開情報

内製化を支える組織体制づくり

内製化を成功させるには、技術やツールの導入だけでなく、それを支える組織体制の整備が不可欠です。経営層のコミットメント、専任チームの設置、部門を超えた連携、そして失敗を許容し学びに変える組織文化の醸成が、内製化を持続可能なものにします。

1 経営層のコミットメント

経営戦略としての位置づけ

内製化を単なるIT施策ではなく、経営戦略として位置づけ、トップダウンで推進する。必要な予算と人材を確保し、長期的な視点で取り組む。

2 専任チームの設置

開発に専念できる体制

兼任ではなく専任のメンバーで構成されたチームを設置。日常業務に追われることなく、開発とスキル習得に集中できる環境を整備する。

3 部門横断の連携

IT部門と事業部門の密な連携

IT部門と事業部門が一体となって開発を進める体制を構築。現場のニーズを的確に捉え、ビジネス価値の高いシステムを実現する。

4 学習する組織文化

失敗を許容し学びに変える

試行錯誤を前提とし、失敗から学ぶ文化を醸成。小さく始めて素早く改善するアジャイルなアプローチを組織全体で受け入れる。

出典:IPA「DX白書2023」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

ローコード開発が内製化を加速する

ローコード開発は、視覚的なインターフェースを使ってシステムを構築する開発手法です。従来のプログラミングに比べて少ないコード量で開発できるため、内製化を進める上での大きな障壁となっていた「人材不足」「開発スピード」「コスト」といった課題を同時に解決できる、内製化の強力な推進力となります。

開発スピードの向上

生産性が3〜5倍に向上

視覚的な開発環境により、従来の開発手法と比較して開発生産性が大幅に向上。市場変化への迅速な対応が可能になります。

開発コストの削減

開発工数を大幅に削減

コード量が少ないため、開発・保守にかかる工数が削減され、長期的なコスト削減につながります。

人材不足の緩和

プログラミング専門知識が少なくても開発可能

業務知識を持つ人材が、高度なプログラミングスキルなしでも開発に参加できるようになり、人材不足の課題を緩和します。

迅速な改善サイクル

小さく作って素早く改善

短期間でプロトタイプを作成し、ユーザーフィードバックを即座に反映。アジャイルな開発スタイルを実現します。

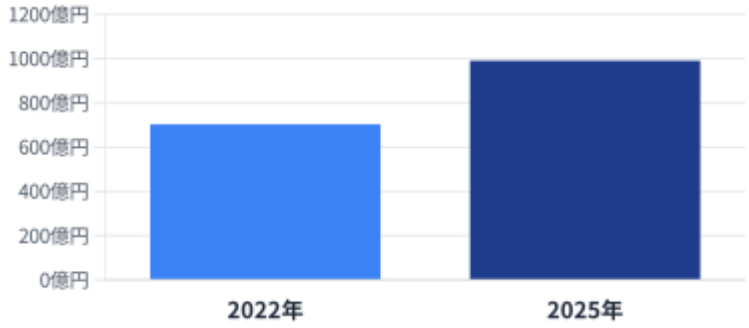
出典:Forrester Research「The Total Economic Impact™ Of Low-Code Development Platforms」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

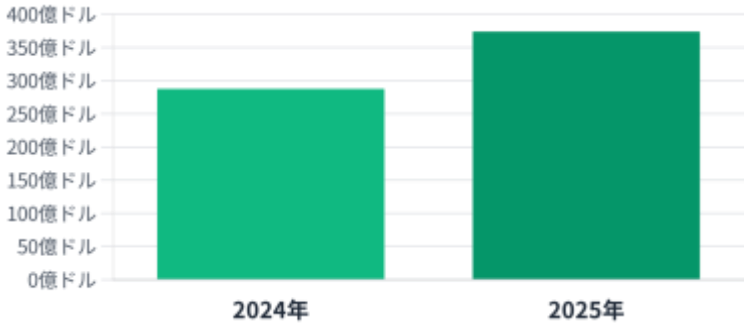
急拡大するローコード開発市場

ローコード開発市場は、日本・世界ともに急速な成長を続けています。DX推進の加速、2025年の崖への対応、生成AIとの連携など、複数の要因が市場拡大を後押ししており、今後も高い成長率が予測されています。

日本市場の成長(約1.4倍)



世界市場の成長(約30%増)



市場成長の4つの背景

- DX推進の加速
- 2025年の崖への対応
- 生成AI活用の広がり
- 全社展開の進展

出典:ITR「ITR Market View:ローコード開発プラットフォーム市場2023」、Gartner「Market Guide for Low-Code Development Technologies」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

内製化成功の鍵

内製化を成功に導く4つの重要要素

1	2	3	4
顧客状況に応じた柔軟な支援	段階的な技術移転	開発基盤の活用	充実した教育・支援体制

これからの企業に求められること

- 内製化を経営戦略として位置づけ、トップダウンで推進する
- 外部パートナーと協働しながら、段階的に内製化を進める
- 失敗を許容し、学びに変える組織文化を醸成する
- 人材育成への継続的な投資を惜しまない
- ローコード開発など新技術を積極的に活用する
- 経営層が長期的な視点でコミットメントを示す

内製化は、企業の未来を自らの手で切り拓くための重要な一歩です

出典:IPA「DX白書2023」

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.

質疑応答

内製化に関するご質問をお受けします

セミナー後もサポートいたします

個別相談会

セミナー後に個別でご相談いただけます

GeneXusデモ

実際の開発環境をご覧いただけます

メール相談

後日のご質問もお気軽にどうぞ

アンケートへのご協力をお願いいたします。

今後のセミナー改善のため、皆様のご意見をお聞かせください。

©Copyright 2025 WeING Co.,Ltd All Rights Reserved.